金沢市戸水C遺跡発掘調査概報

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1979・3

石川県教育委員会

例　　言

1　本書は運輸省第一港湾建設局の委託により昭和53年５月１日～昭和54年３月31日にかけて実施した金沢港泊地造成事業にかかる発掘調査の概要報告書である。なお調査費用は、第一港湾建設局が負担した。

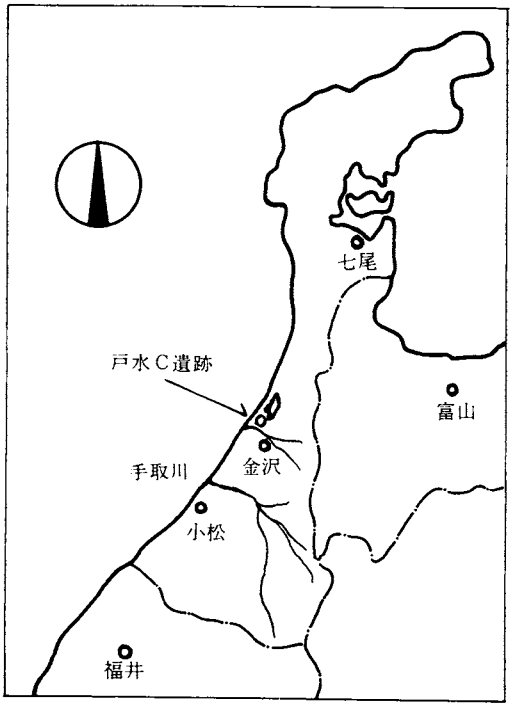
2　調査指導員

高堀勝喜	石川考古学研究会々長	
荒木繁行	〃	副会長
橋本澄夫	〃	幹事

調　査　員

田島明人	県教委文化財保護課主事	
平田天秋	〃	〃
端野英子	〃	〃

3　本書の編集・執筆は調査員の討議のうえ平田があたった。



I　調査にいたるまでの経過

昭和50年度に実施した調査以降、冬期の波浪と港内を航行する船泊の航波により50年度調査区域とそれに後続する未調査区域の自然崩壊の危険が生じてきた。その為、第一港湾建設局と文化財保護課と協議の結果、未調査区域の西側と北側部分について崩壊の防止のため防護柵を新設することとした。がしかし、その防護柵も、52年度の冬期間の波浪により、一部では破損し、未調査区域の崩壊の危険が再度生じるに及んだ（北陸中日新聞昭53．3．10)。その為、53年３月から、数回の協議を双方で重ね、昭和50年度に後続する未調査区域の発掘調査を昭和54年度事業として実施することとなったものである。なお、金沢港泊地造成関係事業に関連した発掘調査は昭和47年、50年と本年度との三次にわたる。

II　調査結果の概略

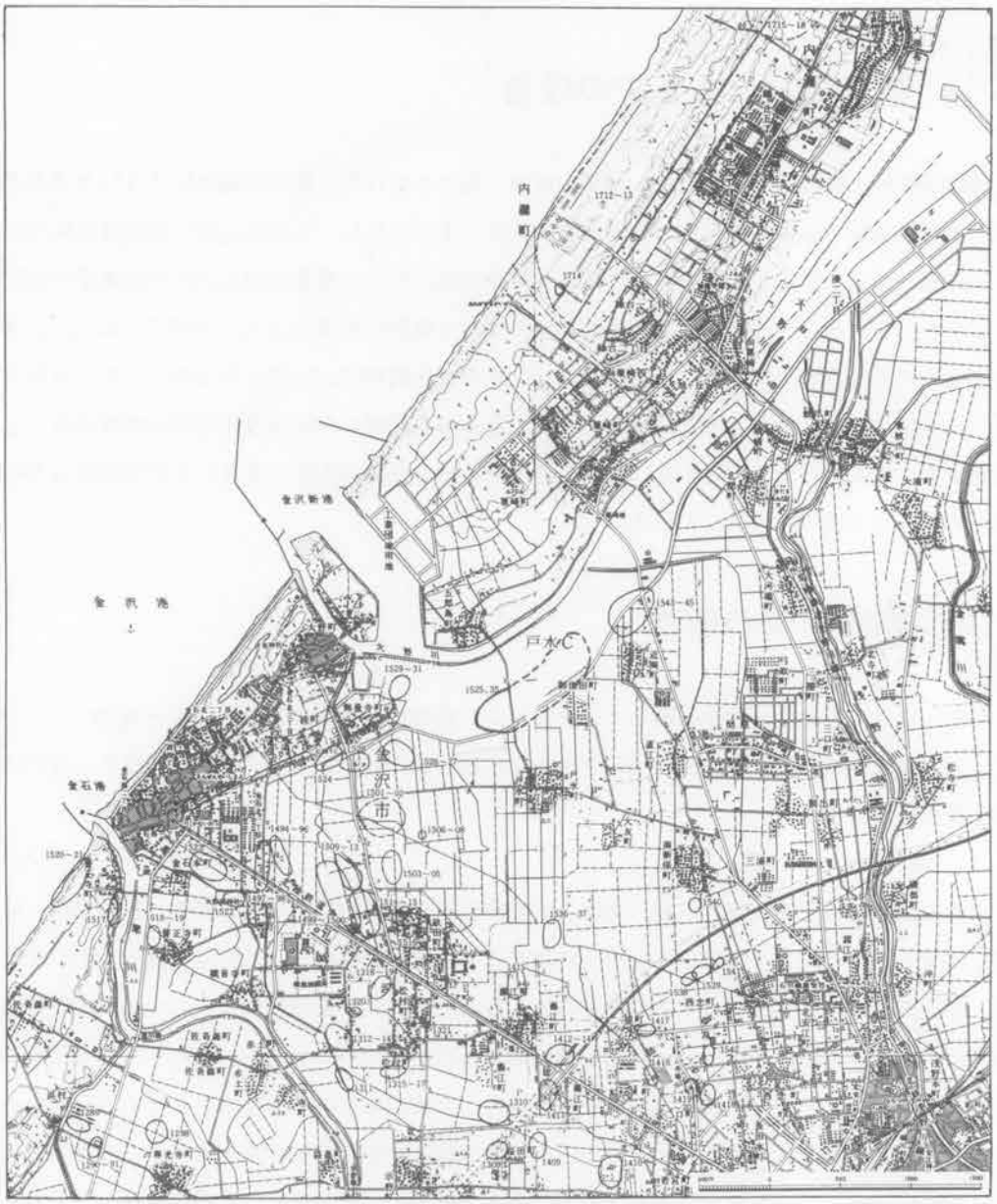
昭和50年度に実施した部分に続いて、それぞれの東側部分と南側部分の調査を実施した。詳細については次年度以降の調査後に刊行される正式報告書に譲るとして、検出した遺構、遺物の概略を記すこととする。

1　遺　　構

検出した遺構には古墳時代前期の溝跡、平安時代から中世期にかけての無数に近い溝跡、中世期に属する（14世紀）大溝跡、平安時代に属する井戸跡（04井戸）、これは素掘りのものである。又、長方形、方形に近い竪穴状の遺構がある。これについては遺物も細片のみの出土で性格不明のものである。４基を検出しているが規模はおおむね250cm×350cmのものであり平安時代以降に属するものと考えている。又、性格不明のピット、土壙が非常に多く検出されている。これらも平安時代以降に属するものと考えられる。掘立柱建物は昭和50年度の分を入れると４棟を数えるが、楚板が遺存している柱穴も存在するのであと２棟以上は増えるものと推定される。それらの掘立柱建物４棟分について、若干の概略を記して、本年度の検出遺構の概略とする。

A）　01　建　　物

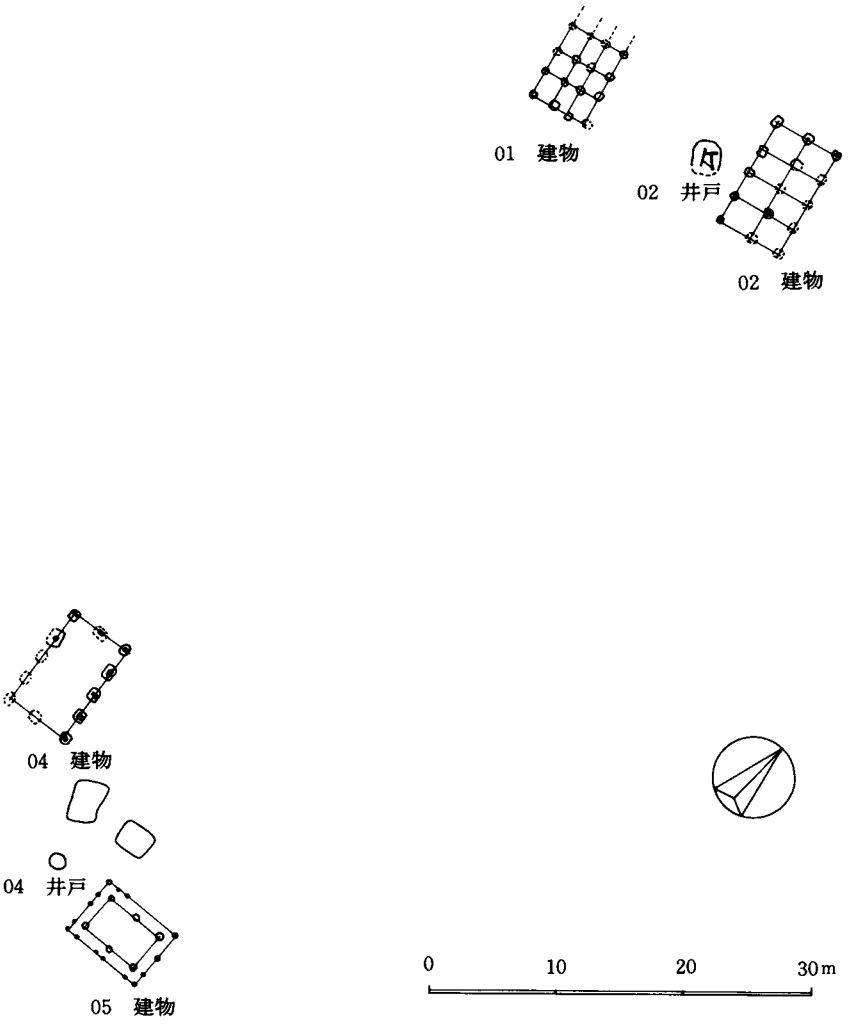
桁行３間以上、梁行３間の南北棟建物と推定される。各柱穴には、柱根、楚板、楚石等の遺存しているものはない。柱間寸法は柱痕跡より復元すると南北側柱列では、210cm（７尺）等間であり東西側柱列では、150cm（５尺）等間で柱筋にすべて柱がたつ総柱の倉庫様の建物となる。据付掘方は不整形なものが多いが、おおむね60×90cmの方形に復元できるものと思われ、柱痕跡の直径もほぼ30cm平均となる。なお建物軸方位は磁北に対して約１°６″西にふれている。



第1図　周辺の遺跡分布図

国土地理院　1：25,000「金石」「粟崎」「松任」「金沢」分載

1289　専光寺染色団地遺跡
1290～91
　　専光寺養漁場遺跡
1298　北塚B遺跡
1309　示野中桜田遺跡
1310　松村高見遺跡
1311　松村どのまえ遺跡
1312～14　松村A遺跡
1315～17　松村B遺跡
1318～19　松村西の城遺跡
1320　松村平田遺跡
1321　松村寺の前遺跡
1409　出雲じいさまだ遺跡
1410　薬師堂遺跡
1411　藤江A遺跡
1412～14　藤江B遺跡
1415　藤江C遺跡
1416　二ロクロチョウA遺跡
1417　二ロクロチョウB遺跡
1418　二ロシミズ遺跡
1419～20　西念クボ遺跡
1494～96　寺中B遺跡
1497～98　寺中遺跡
1499～1500　寺中畝田遺跡
1501～02　畝田無量寺遺跡
1503～05　畝田B遺跡
1506～08　畝田C遺跡
1509～13　畝田遺跡
1514～15　畝田大徳川遺跡
1516　畝田御台場跡
1517　普正寺遺跡
1518～19　普正寺高畠遺跡
1520～21
　　普正寺番屋砂丘遺跡
1522　寺中御台場跡
1523　金石本町遺跡
1524　桂遺跡
1525・35　戸水遺跡
　　戸水C遺跡
1526～27　無量寺遺跡
1528　無量寺B遺跡
1529～31　無量寺金沢港遺跡
1536～37　戸水B遺跡
1538　南新保A遺跡
1539　南新保B遺跡
1540　南新保C遺跡
1541　南新保D遺跡
1542　西念ネジタ遺跡
1543～45　近岡遺跡
1712～13　向粟崎遺跡
1714　大根布遺跡
1715～18　大根布砂丘遺跡



第２図　主要遺構配置図

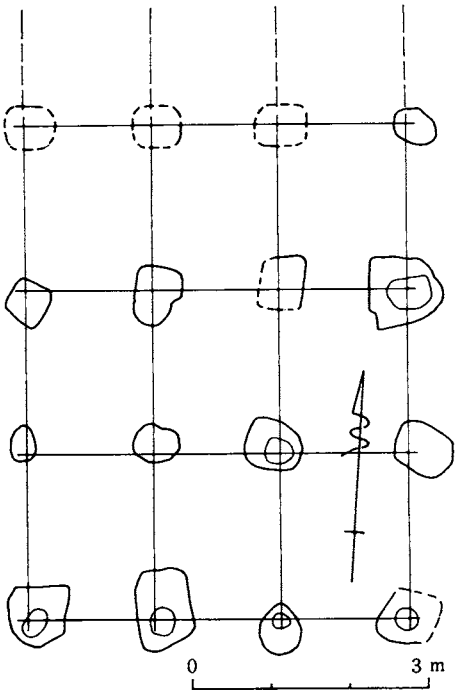
B）　02 建　　物

桁行４間以上、梁行２間以上の南北棟建物である。西側柱列北第４、５柱穴には楚板、西第２側柱列北第１柱穴には柱痕（径28cm）、西第２側柱列北第４柱穴には楚板がそれぞれ遺存していた。楚板はおおむね長30×巾15cm×厚３cmのものを使用している。柱痕、楚板位置から推定できる柱間寸法は桁行は227.27cm(7.5尺）の等間、梁行は西側柱列より300cm（10尺)、270cm（９尺）程度の規模となる。詳細については次年度以降の調査結果をみて訂正したい。なお据付掘方は不整形であるが、おおむね70cm×80cmの方形に近いものであったであろう。この建物も01建物と同様に柱筋にすべて柱のたつ総柱の倉庫様建物となる可能性が極めて強い。建物軸方位は磁北に対して3°５″西にふれている。

C） 04 建　　物

桁行４間、梁行２間の南北棟建物であろう。西側柱列北第２柱穴に柱痕が遺存する他は、検出した各柱穴にはそれぞれ楚板が遺存していた。柱痕は、長径40cm、短径28cmが現存するが、径40cmを越す円柱であったと推定される。なお、底面よりややあがった位置に径10cmの、いかだ穴がある。据付掘方は約120cmの方形をなすと推定される。他のそれはやや小さく約100cm×90cmのほぼ長方形に近いものである。楚板はおおむね15cm×40cm厚さ約５cmのものである。柱穴内に１枚だけのもの２～４枚遺存するものがある。東側柱列南第１柱穴の楚板は、柄穴がみられ廃材を転用したものと思われる。各々の柱間寸法を復元すると240（８尺）cm等間になる。棟軸は磁北に対して約東に1°6′ふれている。

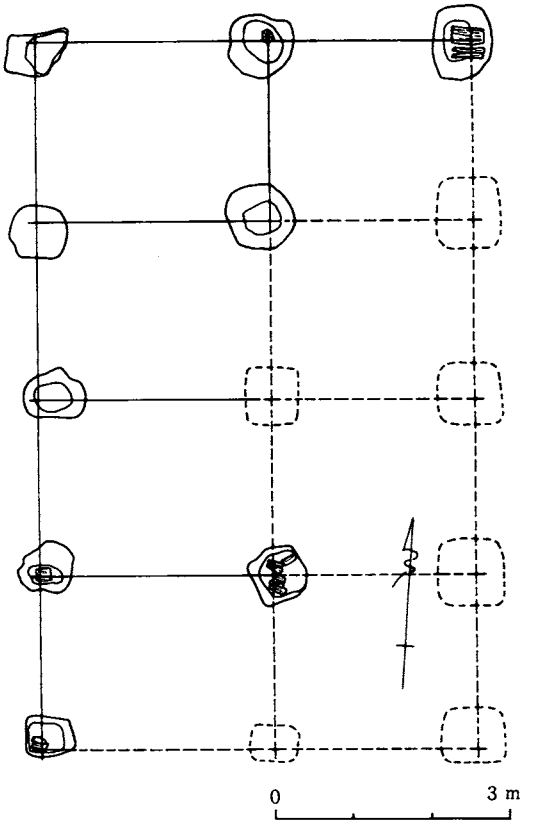
本建物は今年度までに検出されたものの中では据付掘方等からみても規模も大きく、非常に規則的な住居用の建物である。



第３図　01　建物

D） 05 建　　物

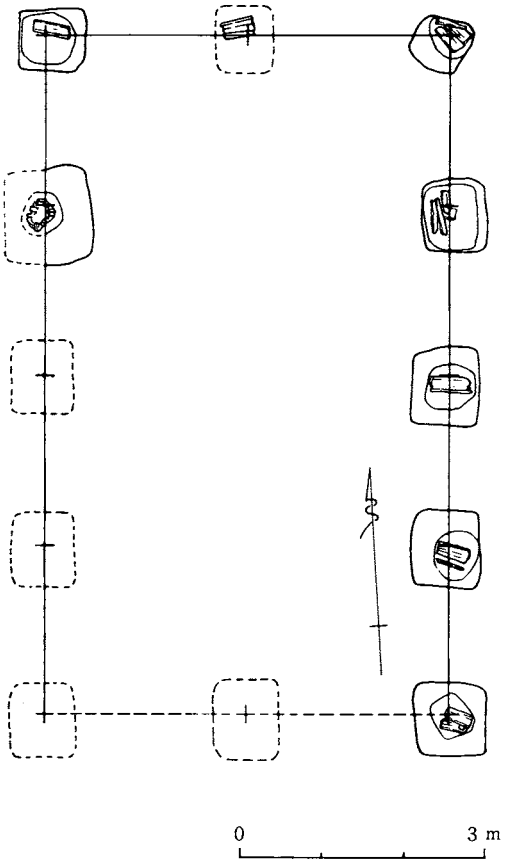
東西棟建物で身舎は１間×２間で四面に付属施設が付くものである。身舎の据付掘方はほぼ長円形に近く約長径60cm、短径50cmを測り、柱痕跡は径20cmを測るものが多い。四面に付属する施設の掘方は20cm×20cmの方形を規調とし、柱痕跡の直径は約10cmのものが多く非常に小さい。この付属施設については類例もなく不明であるが、縁に類する施設かと考えている。柱間寸法を柱痕跡の位置より復



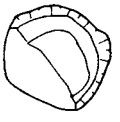
第４図　02　建　物

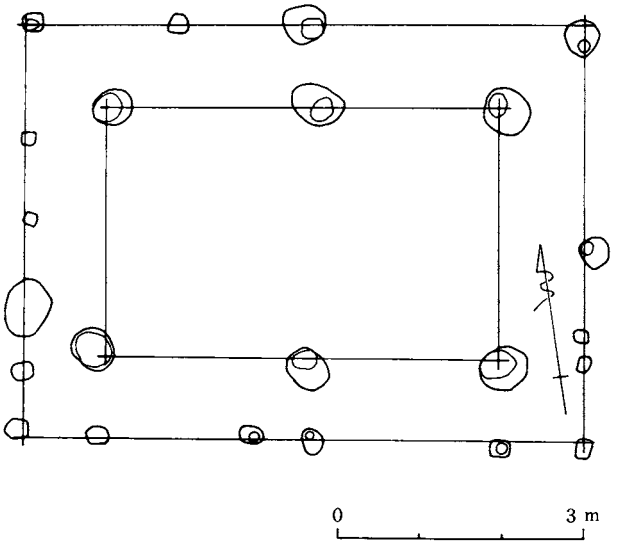
元すると、身舎の南北側柱列は各々240cm（8尺）の等間で、東西側柱列は各々300cm（10尺）となる。又、比較的よく遺存すす付属施設の南側柱列西方1柱よりの復元柱間寸法は100cm×230cm×70cm×190cm×100cmとなり、規格性にとぼしいものとなる。なお建物軸方位は磁北に対して東に約8°振れている。

以上が今年度までに検出した掘立柱建物の概要であるが、現時点ではこれら建物の建立時期、先後関係等についてはほとんど不明である。と言うのも、柱穴検出面の包含層の時期を決めかねると同時に柱穴内から検出される遺物も細片が少数であるなど複合遺跡の難点等からである。今では、平安時代以降とおおまかに把えている現状である。井戸跡内からの出土遺物等から井戸跡と建物の関係を推しながら今後検討を加えたい。又、05建物を除くすべての建物は全柱穴には楚板を用いたと推定される。本遺跡の所在する環境は海抜0.6m、大野川に面する低湿地とを考え合せると



第5図　04　建物


04　井戸



第6図　05　建物

当然の事と言える。が05建物のみは、全柱穴に１ケ所も遺存するものがなく頭初より掘立柱のみの可能性が大である。本建物は構造のうえからも他のそれらとは明らかに相違し、時期的な面からも後出的な要素をもっているものと考えている。集落遺跡の広がりからみると極少な面積であり今後の調査において検討を加えていくこととしたい。

2　遺　　物

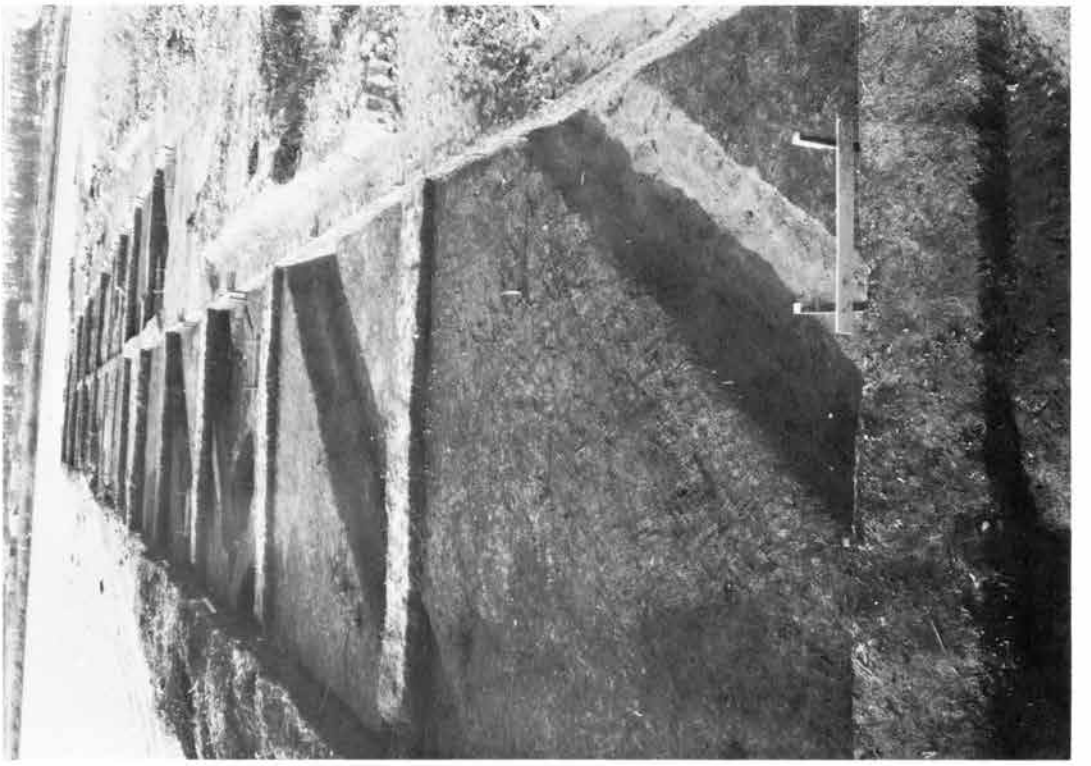
本書には時間的都合その他により実測図等の掲載はできなかったが、昭和50年度（第１次）の調査と同様に各時代に亘る多大の資料の検出をみた。複合遺跡のため各時代の包含層も単純な形では存在せず、今年度分の地点では遺物においては細片が多かった。以下に出土遺物の概要を記すこととする。先ず土器類では周辺一帯に検出したが、古墳時代前時の溝跡（図版８）より出土した土師器一括があげられる。古墳時代全般にわたっては前期の遺物を除けば必らずしも多いとは言えない。奈良・平安時代の須恵器、土師器は大多数をしめるのであるが、時期を峻別できるような資料は少ない。又遺構につくものも少ない。緑釉・灰釉陶もかなりの量があるが、器形を復元できるものは少ない。第１次の調査でも一点出土（胴底部）しているのであるが、緑釉唾壺の坏部の破片が１点出土している。武蔵国分寺跡、調布市杉森遺跡、下総国分尼寺近傍集落跡、平城宮跡（２点以上）、伊勢斎王宮跡等からの出土が報ぜられ近年の調査で増えつつあるが決して多いとは言えない。中世の遺物は断片的に出土している。珠洲、越前、瀬戸等があるが量はさほど多くはなく、時期も古いもの（13世紀）はない。青磁、白磁も破片ばかりであるが、40～50点出土している。大溝跡（図版９）から青磁碗底部２点が出土しているが、おおよそ14世紀代のものである。他の地点のものもほぼ同時期と考えられる。又、所属年代を決めかねるが土硾の量が非常に多い。一方、石製品では石鏃２点、紡錘車１点がある。木製品では箸状木器（図版９：中世大溝跡）がある。金属製品では宋銭（熙寧元宝か）１点、他に鉱滓が若干ある。

Ⅲ　お　わ　り　に

本年度の調査の概略を掘立柱建物を中心に記してきたのであるが、次年度以降の調査結果、正式報告書により今後に残された臨海集落の問題点は解決してゆきたい。

図版1

遺跡周辺の航空写真



調査区西側全景

調査区西側細部

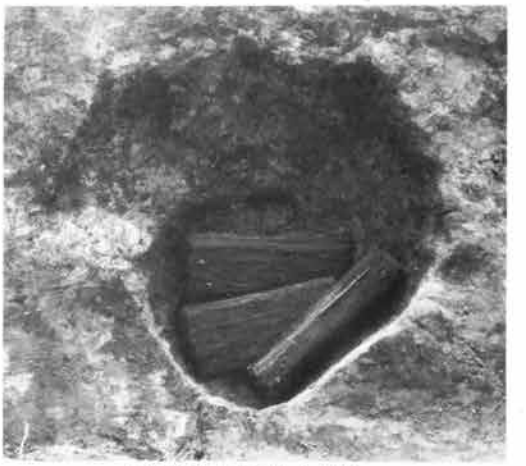
調査区北側部分全景（東より）

調査区北側部分全景（南より）

04 建　物

04建物西側柱列北第2柱穴柱痕

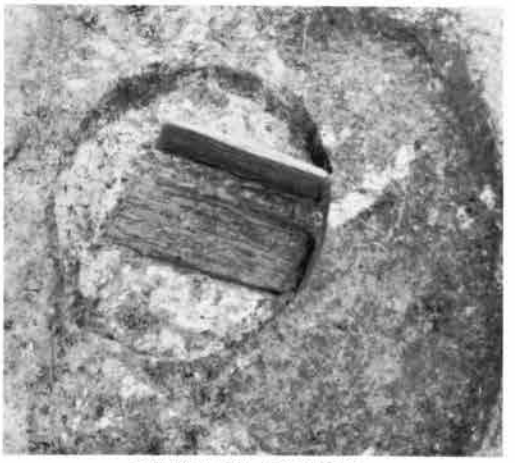
西側柱列北第1柱穴楚板



東側柱列北第1柱穴楚板

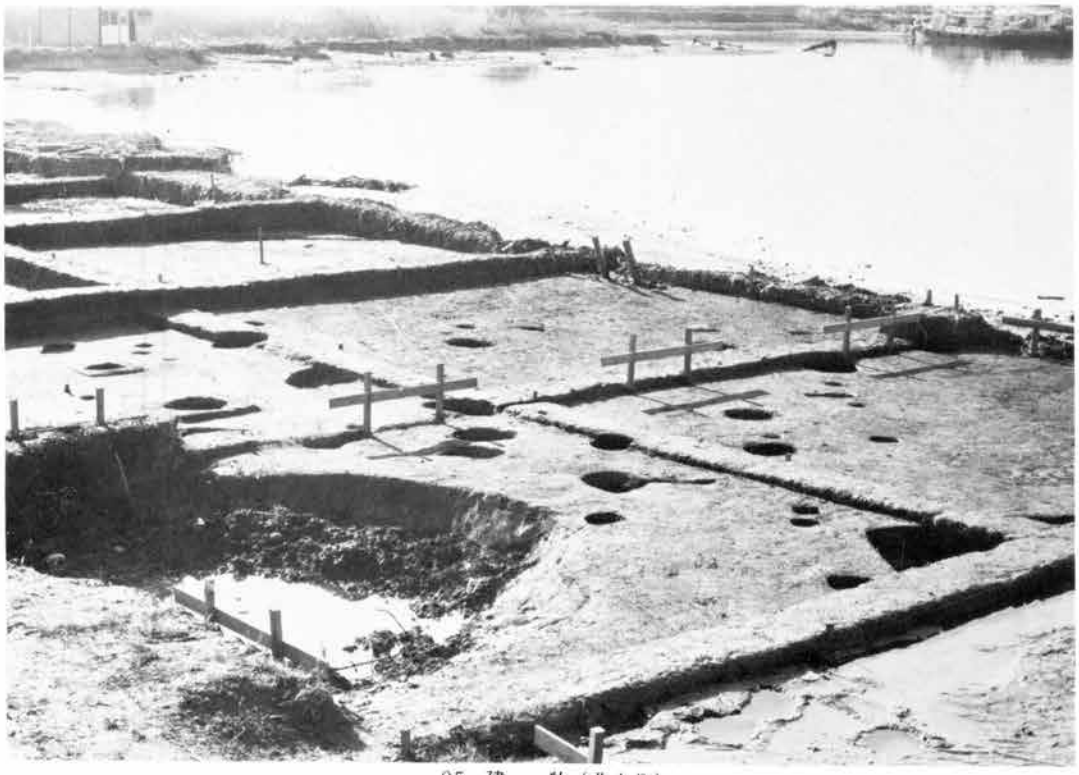
東側柱列北第2柱穴楚板

東側柱列北第3柱穴楚板



東側柱列北第4柱穴楚板

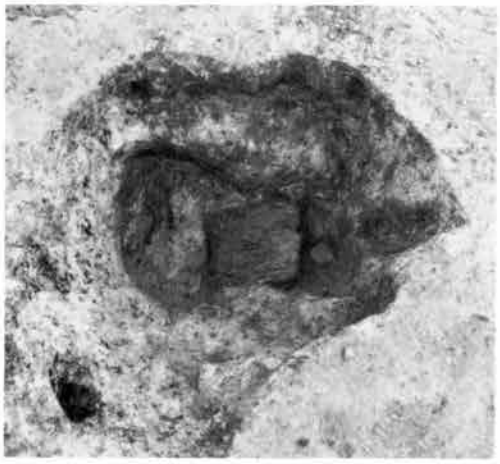
東側柱列北第5柱穴楚板



05 建　物（北より）

05 建　物（東より）

02 建　物（東より）



02建物東側柱列北第4柱穴楚板

02建物東側柱列北第5柱穴楚板

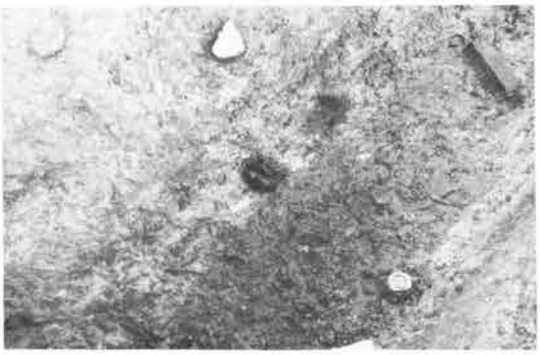
調査区北側部分古墳時代前期溝跡

同上　土師器出土状態

同上　土師器出土状態

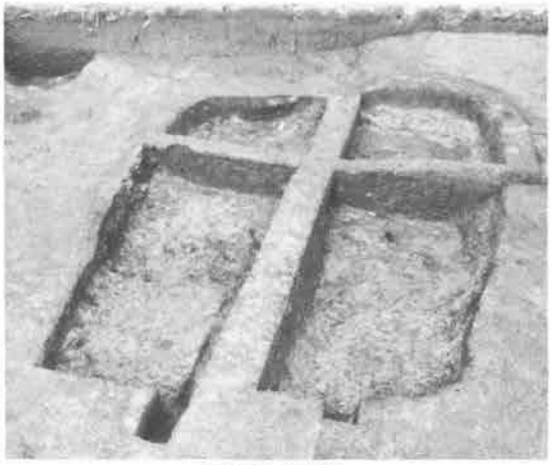
中世大溝跡（東より）

中世大溝跡青磁出土状態

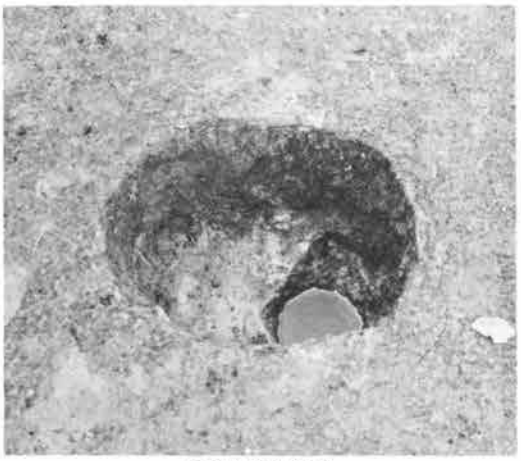


中世大溝跡箸状木器出土状態

04　井　　戸



方形竪穴状遺構

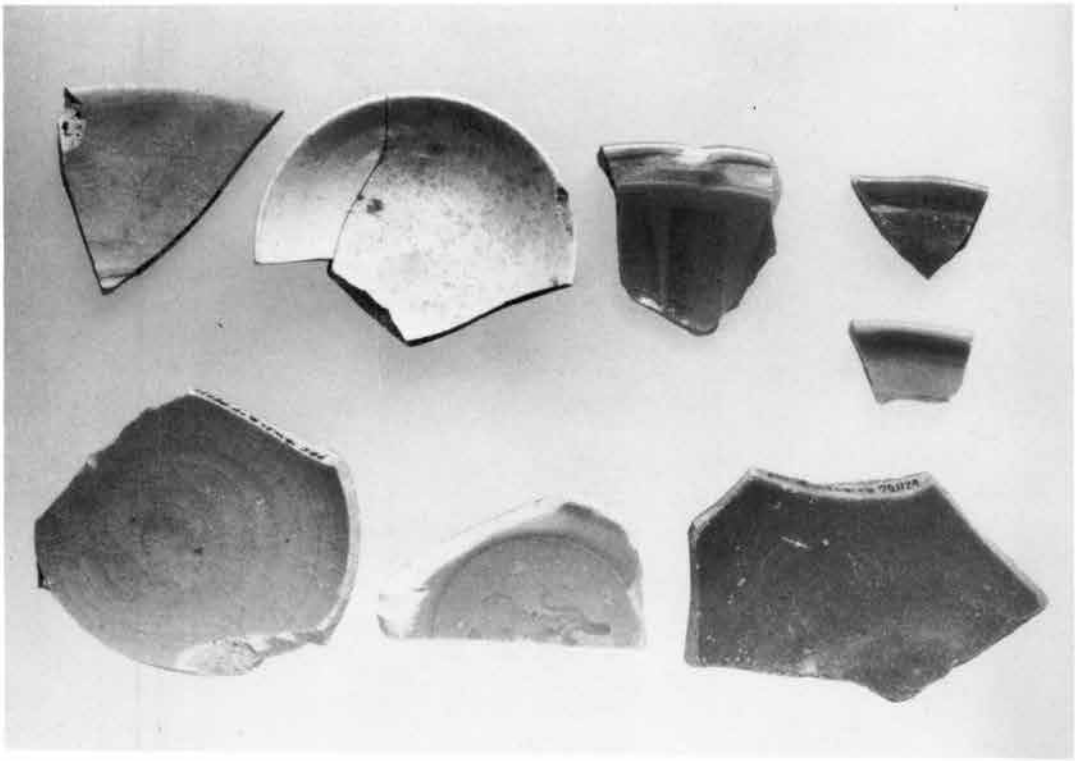


05建物据付掘方

05建物据付掘方

05建物柱穴と層序

平均的属序



船載青白磁（上:表、下裏）

金沢市戸水C遺跡発掘調査概報

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

印　　刷　昭和54年3月25日
発　　行　昭和54年3月31日
編　　集　石川県教育委員会文化財保護課
発 行 者　石川県教育委員会
印 刷 所　中川大正印刷㈱